

平成23年5月12日現在

機関番号：15301

研究種目：若手研究(B)

研究期間：2007～2010

課題番号：19730561

研究課題名(和文)

幼稚園における慢性疾患患児の支援ニーズの明確化と支援モデルの構築に関する研究

研究課題名(英文)

Research on preschool teachers' awareness of the care of children with chronic diseases and the proposal of the support model

研究代表者

片山 美香 (KATAYAMA MIKA)

岡山大学・大学院教育学研究科・准教授

研究者番号：00320052

研究成果の概要(和文)：

担任クラスに慢性疾患をもつ子どもが在籍する保育者は、回答者の8割を越えていた。多かった疾患は、食物アレルギー、アトピー性皮膚炎、喘息であった。保育者が挙げた1事例に関する回答から、保育者は子どもの症状や注意事項を概ね理解していると認識していることが示された。約4割の保育者が、日々の保育の中で必要な配慮が十分できているかということや、緊急時の対応など、身体管理に不安を抱えていることがわかった。

研究成果の概要(英文)：

More than 80% of preschool teachers were in charge of had children with chronic diseases. Common diseases included food allergy, atopic dermatitis, and asthma. Each preschool teacher mostly understood children's symptoms and precautions. It was clarified that about 40% of teachers were anxious about physical management, such as emergency responses, or whether or not they sufficiently understood the procedures necessary for childcare.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	500,000	0	500,000
2008年度	359,333	107,799	467,132
2009年度	500,000	150,000	650,000
2010年度	500,000	150,000	650,000
年度			
総計	1,859,333	407,799	2,267,132

研究代表者の専門分野、科研費の分科・細目について記入すること。また、当該研究課題の研究内容の内容をよく表していると思われるキーワードを1項目以上8項目以内で記入すること。なお、化学式等の使用は極力避けること。

研究分野：発達臨床心理学

科研費の分科・細目：教育学・特別支援教育

キーワード：幼児 慢性疾患 保育 保育所 幼稚園 保育者 保護者 連携

1. 研究開始当初の背景

筆者のこれまでの研究では、慢性疾患患児、

とりわけ、悪性度の高い者や治療が長期にわたるような場合は、健康な子どもに比べ、病

気に対する不安から病気である自分自身に対してネガティブな自己イメージを抱き、自己イメージの発達に病気を持っていない対照群に比べて未熟であることが示した(片山,1999a, 1999b, 2002b)。

平成 12-13 年度に科学研究費補助金・症例研究(A)を受け、「病棟における慢性疾患患者と看護者との相互作用に関する心理学的研究」を行い、患者が年少で、厄介な治療ほど親への配慮が重要であることを明らかにした(片山,2003a)。

平成 16-18 年度に科学研究費補助金・若手研究(B)を受け、「慢性疾患患者および家族の QOL 向上のための心理社会的支援モデル作成に関する研究」として、患者および親に患者の自己イメージを調査するとともに、自己イメージの確立と病気意識との関連について検討し、患者の QOL 向上において重要な場であると考えられる学校環境の現状について、養護教諭を対象に調査を行った。さらに、スクールナース制度のあるアメリカ、ブレマントン市の学校を視察するとともに、スクールナース、その他の教職員から患者の受け入れの現状を聴取し、日本との比較を行った。

患者の良好な療養環境を整えるためには、親との連携が不可欠である(片山,2003b)。とくに、患者の重要な育ちの場となる「幼稚園や学校」と病気のことについて情報を共有し、必要な支援を得て園や学校での生活がおくれるかどうか、患者はもとより、保護者にとっても心理的安定の鍵となる(片山, 2005)。文部科学省は、平成 15 (2003) 年 3 月の「今後の特別支援教育の在り方について(最終報告)」から、一人一人の教育的ニーズに応じた特別な教育的支援の充実化をうち出し、幼児期からの支援の重要性にも言及している。慢性疾患患者もその対象として考

慮されるべきであるが、実態調査が不十分であり、患者の幼稚園生活に関する知見はほとんど得られていない。養護教諭の配置が義務付けられていない幼稚園において、医療的なケアニーズを有する患者をどのように把握し、支援しながら患者の心理社会的側面をはぐくんでいくかはきわめて重要な課題である。幼稚園という育ちの“場”の物理的・人的環境整備について保育者、保護者、医療機関による連携の具体的な支援モデルの提示が急務であると考え、本研究に着手した。

2. 研究の目的

(1)慢性疾患患者の幼稚園生活に関する実態調査、幼稚園教諭の慢性疾患患者への支援に関する認識調査(患者の支援ニーズの理解度、支援上の課題、保護者や医療機関との連携(質問紙調査))。

(2)在園児の園生活に関する実態調査(園生活に疾患が及ぼす影響などの質的検討)(観察研究)。

(3)上記の研究 1, 研究 2 をふまえて、実際の事例をもとに支援計画を作成し、支援の実施を図る。

(4) 上記(3)の結果を評価し、幼児期の慢性疾患患者(病弱児)を対象に、疾患の特徴をふまえた個に応じた支援教育モデルを作成する(患者にかかわる保育者、保護者自身への支援のあり方、医療機関との連携のあり方も含めて)。

3. 研究の方法

(1) 平成 19 年度

①研究に必要な文献の収集を行った。

②A 市内の保育所および幼稚園における慢性疾患患者の在園状況および支援の実態に関する調査を行った。

(2)平成20年度

A 市内の公立保育所の担任保育士を対象に、受け持ちクラスの慢性疾患患者の在籍数、疾患名、支援の実態や課題等に関する質問紙調

査を行った。

(3) 平成21年度

A市内の公立幼稚園の担任保育士を対象に、受け持ちクラスの慢性疾患患児の在籍数、疾患名、支援の実態や課題等に関する質問紙調査を行った。

(4) 平成22年度

A市内の公立保育所および幼稚園における慢性疾患患児の在籍状況や支援の実態および課題等について比較検討を行い、乳幼児期にある慢性疾患患児に対する集団保育の意義と今後の課題について、既存のデータに関して分析を行った。

4. 研究成果

(1) A市内の公立保育所の実態調査から

A市内の公立保育所の担任保育士を対象に、慢性疾患患児の保育について問う質問紙を作成し、全54園に対して計270部の調査用紙を配布した結果、45園（回収率83.3%）、198人の担任保育士から回答が得られた（回収率73.3%）。回答が不完全であったデータ4人分を削除し、194人分のデータを分析対象とした。担任クラスに1人も慢性疾患患児が居ないと回答したのは34人（17.5%）であった。在籍人数の最も多かった疾患は、「食物アレルギー」で58.1%、次に「喘息」で42.5%、「アトピー性皮膚炎」で39.4%と続いた。

次に、担任している具体的な1事例に関する回答（160人分）では、担任をしている患児の症状に関する理解度について5段階評定を求めたところ、132人（82.6%）が理解できていると回答した。59人（36.9%）の保育者が「保育上、不安なことがある」と回答し、保育上の注意事項を誤って厳守できなかった場合等の緊急時の対応への不安が見てとれた。疾患ゆえの制限などにより他児と同様のことができないなどのストレスを抱えた子どもに関して、57人（35.6%）の保育者が子どもの

心理社会的発達に影響があると回答しながらも、疾患との兼ね合いでやむを得ない事柄でもあり、保育上の課題として残されていた。また、保護者の要望に全面的に応じる努力をしつつも、過度と思える保護者からの要望にどこまで応じるべきかなどの葛藤を抱えつつ保育にあたっている現況が明らかになった。疾患に対する十分な理解をふまえたうえで、最大限に子どもの発達を促す保育のあり方の模索が課題として示された。

(2) A市内の公立幼稚園の実態調査から

A市内の公立幼稚園の担任教諭を対象に、担任クラスにおける慢性疾患を有する子どもの人数と疾患の内訳、さらに、その内の1事例について、担任としての疾患理解の程度や医療機関との連携に関すること、保育上の現状と課題、保護者との連携上の現状と課題等に関する質問紙調査を行った。その結果、165人の教諭から回答が得られた。

担当している慢性疾患患児の疾患の内訳は、喘息（19.4%）と食物アレルギー（19.4%）が最も多く、次いでアトピー性皮膚炎（15.2%）が多く、てんかん（6.7%）も少数見られた。

担当児の疾患理解については、「やや理解できている」という回答が最も多く77.2%であり、「とても理解できている」という回答は4.4%と少なかった。医療機関との連携があると回答したのは1件のみであった。保育上の不安については、「あまり不安がない」との回答（59.6%）が最も多く、「やや不安」との回答は25.7%で、「とても不安」が3.7%と、不安を有する者は約3割であることが明らかになった。

慢性疾患を有することが子どもの心理社会的発達に影響があるかどうかについては、約半数が「あまり影響ない」と回答したものの、約半数が影響の存在を認識していることが示された。その理由として、活動や食事に制限

があることから他児との違いが受け入れられないことや、体調が優れないために欠席が多くなり、遊びに入りにくかったり、友だちとの関係を築きにくかったりすること、したいことを思う存分できないこと、かゆみ等で集中力が途切れることなどが挙げられていた。また、14.6%の教師が保育上の困難さを感じていた。その理由として、担任が一人であるために十分な個別配慮や対応ができにくいことや、他児と異なった活動内容となる場合の説明の仕方、保護者から聞いている緊急時の対応のあり方だけで問題ないのかなどを挙げていた。保育上の今後の課題があると回答したのは28.9%で、具体的には医療的な専門知識をもつ養護教諭の配置や、保護者との密な連携、教師自身が疾患に関する研修を積むことなどが見られた。

保護者から園生活における要望があると回答したのは48.5%で、内容としては食べ物に関するものが最も多く、その他、体調の変化への対応および保護者への連絡が求められることなどであった。保護者がわが子の園生活に不安を持っていると回答したのは27.2%で、他児がわが子のことをどのように捉えているかを気にすることが示された。また、32.1%が子どもと保護者とのかかわりに気なることを抱えていた。保護者が過干渉や過保護になること、逆に親が厳しく接することなど、極端な子どもへのかかわりが挙げられた。65.7%が保護者から子育てに関する相談を受けており、最も多いのが友だちとのかかわりに関することであった。16.0%が保護者との連携に困難を感じており、幼稚園での様子や課題などの伝え方、保護者と園側との認識のズレなどが連携を難しくしている要因であることが示された。そのため、保護者との連携上の課題として、十分に話し合う時間を確保することや、ありのままの子どもを伝えつつ、確

かな育ちもしっかりと示していくことの重要性、発達についての見通しを保育の専門性としてしっかり持ち、小学校につないでいくことなどが挙げられた。

(3) A市内の公立保育所および幼稚園における慢性疾患患児の在籍状況や支援の実態および課題等に関する比較分析から

A市内の公立保育所に在籍する慢性疾患患児と同市内の公立幼稚園に在籍する慢性疾患患児の担任保育者を対象とした調査結果の比較分析より、慢性疾患患児の保育の実態や課題等には共通点および相違点が見いだされた。

受け入れられている慢性疾患の種類と割合はほぼ同様の傾向が見られたが、保育所は子どもが一日の大半を過ごす場所であることから、長時間にわたる生活のなかで給食や服薬、午睡などにおいてさまざまな養護上の配慮が求められていることが明らかになった。一方、幼稚園は保護者および保育者双方に、教育の場として強く認識されていることが窺われ、患児の友だちとの関係構築や個々の発達の見通しを明確にもつことや、保育者が保護者と共に患児の特性をより良く伸ばしていくため、意識的に連携関係を深めるよう取り組んでいることが示唆された。

また、今後、保育所および幼稚園のいずれにおいても、さまざまな支援を要する子どもの存在の多様化が予想される。その多様な実態やニーズに適切に対応できる医療的知識や技術等を保育者がもつには限界を感じる者が少なくないことが明らかになった。保育者の役割はすべての在籍児の教育および養護を一体的に行うことである。その役割を十分に遂行するには、慢性疾患患児のような特別な配慮を要する子どもに関する医療上の知識を得たり、適宜必要な支援を行うための技術を身につけることは当然のことであると考えられるが、保育者がそのために充当できる時間や

労力には限りがあることもまた否定できない事実である。そのため、保育者が本来の教育や養護を十分に行うことが可能となるよう、施設内の連携スタッフの充実を図ること、つまり、専門的な医療上の知識や技術を有する職員の配置の重要性が再認識された。

5. 主な発表論文等

①雑誌論文（計1件）

1. 片山美香 保育士がもつ慢性疾患患児の保育への意識に関する研究 保育学研究, 査読有, 第48巻第2号, 2010, 145-156.

②学会発表（計1件）

1. 片山美香、岡田あゆみ 保育士がもつ慢性疾患患児の保育への意識に関する研究, 第56回日本小児保健学会, 2009年10月31日, 大阪国際会議場.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

片山 美香 (KATAYAMA MIKA)
岡山大学・大学院教育学研究科・准教授
研究者番号：00320052